



大阪+知的障害+地域+おもろい=創造

知の知の知の知

社会福祉法人大阪手をつなぐ育成会 社会政策研究所情報誌通算 2942号 2016.4.4 発行

ワークショップ 全身でアート楽しむ 障害児と健常児と一緒に 九大・大橋キャンパス
／福岡 毎日新聞 2016年4月3日

学生の顔に絵の具を塗る子供

障害児と健常児らが一緒になって床に敷き詰めた段ボールなどに絵を描くワークショップが2日、九州大大橋キャンパス（南区）であり、子供から大人まで参加者は全身を使って思い思いにアートを楽しんだ。



県内の障害児の家族でつくる「すまいるん♪」（林政之代表）と九州大の学生団体「だんだんラボ」などが、アートを通じて障害の有無に関わらず子どもたちに伸び伸びと感性を育んでもらおうと企画した。

この日は市内の事業所でアート活動をする障害者も参加。自由に絵を描きながら、徐々に手のひらや足を使ったり、互いの顔や体に絵の具を塗ったりして、段ボールなどだけでなく体中も色とりどりの姿に変化させていた。林代表は「イベントを通じて障害児のことを知ってもらい、障害児自身もコミュニケーション能力を身につけてほしい」と話していた。【佐野格】

障害者と一緒に汗 スポーツ楽しもう 千葉で小中生にアスリート指導

東京新聞 2016年4月4日

子どもたちと一緒に走る多川選手（手前）=千葉市で

健常者と障害者が一緒にスポーツを楽しむ「アスリート・スポーツ交流会」が三日、千葉市中央区の青葉の森スポーツプラザであった。県内外の小中学生六十五人が参加。五輪やパラリンピックに出場経験のある一流アスリートらの指導で、ハードル走やマラソンなどを楽しんだ。



短距離は二〇一二年のロンドンパラ五輪の百メートルで、五位に入賞した多川知希選手（30）が指導。デモンストレーションでは健常者の選手と競り合うスピードを見せた。生まれつき右前腕部が短いという多川選手は「今まで健常者と障害者が一緒にスポーツをする機会は少なかった。スポーツは誰でも楽しめるんだと感じてもらえれば」と話した。

障害者スポーツの体験コーナーもあり、千葉市立北貝塚小の前田航希君（9つ）は陸上競技用車いすに試乗。「想像以上に速い。ブレーキの操作なども楽しい」と笑顔を見せた。

前田君は未熟児として生まれた影響で運動が苦手で、以前はスポーツが好きではなかつ

た。だがこの日のイベントを主催したシオヤレクリエーションクラブ（SRC、千葉市）の会員となったことをきっかけに、徐々にスポーツを楽しむようになってきたという。

SRCの塩家吹雪代表（44）は「障害は個性だ。健常者と分けるのではなく、一緒にスポーツを楽しめると伝えたい」と話した。SRCは二〇年の東京五輪・パラ五輪に向け、南関東を中心に同様のイベントを開いていくという。（渡辺陽太郎）

木村草太の憲法の新手（29） 児童相談所のあり方 子の権利守る新制度必要

沖縄タイムス 2016年4月3日



木村草太氏

相模原市で、児童相談所に通所していた男子中学生が自殺を図り、重い障害を負った後に死亡した。生徒は、両親と離れて施設で暮らしたいと申し出ていた。児童相談所は、親が定期的な指導に応じていることもあり、強制的な隔離措置を行うだけの急迫性はないと判断した。しかし、その後も虐待が続き、惨事に至ったという。

多くの人は、児童相談所の対応不足を感じただろう。児童相談所は増え続ける業務に疲弊している。人員・予算の不足に対する早急な手当が必要だ。ただ、子どもの安全確保には、「量」だけでなく、「質」の面で見直すべきこともあるのではないかと。

児童相談所は、「児童に関する家庭その他からの相談」、「児童及びその家庭」についての調査・判定、指導、「児童の一時保護」など幅広い業務を担当する（児童福祉法12条、11条）。子どもの成育環境を整えるためには広範な配慮が必要なためだ。

児童相談所は、子どもと家庭との関係を取り結ぶことを重視しており、必ずしも子どもの代弁者ではない。子どもの主張に耳を傾けつつも、家庭の意見にも配慮しなくてはならない。両者の意見が対立すれば、どちらの利益・意見を優先させるかの判断までしなくてはならない。子どもの当面の意思に反する対応をとることもある。

つまり、子どもと家庭の利害対立という観点から見た時、今の児童相談所は、原告・被告双方の弁護士と裁判所の役割を同時に担っているようなものだ。これでは、子どもが心から安心できる対応にならないのも、やむを得ないのではないかと。

司法の現場では、各当事者がそれぞれに利益・意見を主張する。自分だけではうまく主張できない人は、自分たちの代弁者である弁護士を付けることもできる。そして、中立的な第三者が、両当事者の主張を聞いて裁定する。これを対審構造という。憲法82条は、法廷で正義を実現するために、裁判は対審構造の下に行うと規定する。

このシステムは、児童相談所の在り方にも重要な示唆を持つ。児童相談所の業務は、裁判所に匹敵する重要なものだ。だとすれば、児童相談所がいかなる対応が適切かを判断する前に、子どもの主張を専属的に聞く人がいなければならないはずだ。

未成熟な子どもの利益を守るのは、本来は保護者の仕事だ。しかし、保護者と子どもとの間に利害対立が生じた時には、保護者に代わって子どもの権利を守る代理人が不可欠だろう。家庭からの隔離の訴えがあれば、とりあえず保護する。それに不満のある家庭には不服申し立てを認め、第三者による最終判断をする。そうした制度を構築すべきではないだろうか。

「子どもの権利」がうたわれて久しいが、いまだに、子どもは「権利の主体」ではなく、「保護の対象」と理解されているように思われる。親としては、「子に良かれ」と思っていることが、子の意思に反すること、利益侵害の可能性を認めるのは辛いことだ。しかし、その辛さを受け入れることが、子の人格の尊重の第一歩だろう。保護・教育の名の下に、子どもの権利侵害の危険が隠れていることを自覚しなければならない。（首都大学東京

教授、憲法学者) (木村氏は4月1日から同大教授に就任しました)

里親増やし 虐待死防げ...乳児の養子橋渡し委託

読売新聞 2016年04月04日

◇府、民間に

生まれて間もない赤ちゃんの虐待死を防ぐため、府は2016年度から、病気や経済的な理由などで実の親が育てられない赤ちゃんを、養子として育てたい里親家庭に積極的に委託する取り組みを始める。虐待対応で忙しい児童相談所に代わって、橋渡し役を民間団体に委託し、子供と里親をきめ細かく支援する態勢を整える。

厚生労働省によると13年4月～14年3月に、虐待で死亡したことがわかった18歳未満の36人のうち0歳児は16人(44%)。府内でも2月、大阪市内で生後2か月の長男を暴行して死なせたとして父親が逮捕されるなど、0歳児が虐待死する事例が後を絶たない。また、実の親と暮らせない3歳未満を受け入れる乳児院でも0歳児の割合は高い。14年度、府が所管する4施設に入所した113人のうち、約6割の66人は0歳児だった。

府はこうした赤ちゃんを減らすため、養子縁組をして恒久的に育てられる里親を増やし、支える態勢が必要と判断。府内では昨年3月現在、養子縁組を希望する里親に育てられている子供は9人(うち0歳児は4人)にとどまることから、今後、里親のニーズを把握して受け入れを支援したり、新たな里親のなり手を探したりする民間団体を募集して、6月から活動してもらう考えだ。

委託費として、16年度予算に1294万円を盛り込んだ。府家庭支援課の担当者は「不妊に悩む方などに、里親としてわが子を迎える選択肢があることを知ってもらうきっかけにもなれば」としている。

あの日の防災無線 引きこもりの扉を開けた

河北新報 2016年4月4日



自立を支援する施設で、手作業に励む斎藤さん。若いころに憧れたピアスを40歳の誕生日に初めて着けた=仙台市若林区

東日本大震災が発生した日、仙台市太白区の斎藤淳子さん(44)は20年近くに及んだ引きこもりを脱した。当時住んでいた宮城県南三陸町で避難を呼び掛ける防災無線の声に背中を押され、自宅の扉を開けた。5年が過ぎても人と接するのは怖い、

「助けられた命。社会復帰して誰かの役に立ちたい」と前を向く。2011年3月11日、激しい揺れが収まった後、斎藤さんは自宅で防災無線を聞いていた。「高台に避難してください」。繰り返し呼び掛ける声のトーンは切迫感を増していった。自宅のある4階建ての集合住宅は海のそば。「危ないかもしれない」。迷った末、外に出る決断をした。

靴や服がどこにあるのかも分からず、準備に手間取った。玄関を開けると、津波は既に防潮堤を越えていた。追い立てられるように屋上へ逃げた。津波は辺り一面をのみ込み、屋上にいる自分の足元ぎりぎりまで達して止まった。

斎藤さんは高校を中退後、仕事をしていた時期もあるが、20代には自宅にこもるようになった。世間で当たり前のことができない負い目から心を閉ざした。「今更、外に出ても仕方がない」と諦めていた。

震災でそれが変わった。家が被災して行き場を失い、引きこもりからの自立支援に取り組む仙台市の社会福祉法人「わたげ福祉会」の施設で生活した。2年前からはアパートで1人暮らしをしながら施設に通って就労訓練に臨んでいる。

社会復帰の壁は高く、長い空白の時間への後悔は消えない。気持ちの浮き沈みは今も激しい。「震災以降、自分の限界以上に頑張っていた」。うまくいかず自己嫌悪に陥り、一時はまた引きこもり状態になった。

ただ、震災前とは明らかに違う。施設の友人との会話などを通じ、人とつながる楽しさに気付いた。行ったり行かなかったりしている施設に通う頻度を高めるのが目標だ。

あの日、町の防災対策庁舎で避難を促し続けた町職員は津波の犠牲になった。自分はその声に救われた。

直後は人前に出た極度の緊張から嘔吐（おうと）が続き苦しかった。3日ほどして仙台市に移り、避難所となっていた仙台二中に身を寄せた。同校の教職員や医療関係者、地元の町内会長らが親切に接してくれた。

「くじけたら、皆さんに申し訳ない。まずは自分のことは自分でできるようになりたい」。それが恩返しの一歩だと斎藤さんは思っている。

3000人の「ようこそ」募集



岩手日日新聞 2016年4月4日

岩手国体、いわて大会に向けた「3000人の『ようこそ』で会場を飾ろうプロジェクト。」で募集している手書きのシールメッセージ

シールプランタープロジェクト

10月に開幕する第71回国民体育大会「希望郷いわて国体」と第16回全国障害者スポーツ大会「希望郷いわて大会」に合わせ、県実行委員会は両大会の開・閉会式で「ようこそ」などの手書きのメッセージシールを貼ったプランターを設置し、大会関係者の来県を歓迎するプロジェクトに取り組む。3000枚のシールを作製する予定で、協力を呼び掛けている。

県実行委が花いっぱい運動の一環で来県者に歓迎の気持ちを伝える一方、県民運動の機運醸成を図る「3000人の『ようこそ』で会場を飾ろうプロジェクト。」として実施する。

プランターの貼り付け用シール（縦12センチ、横46センチ）に、「ようこそ」を含む応援メッセージなどを記入してもらい、大会関係者を歓迎するとともに、復興支援への感謝も伝える。両大会の開・閉会式会場と、いわて大会の競技会場10カ所に設置する予定で、約1500枚ずつ使用する計画。

プロジェクトへの参加募集は1日に開始しており、今後はイベントやボランティア登録団体、福祉施設などへ参加協力を呼び掛けていく。

県実行委では「復興支援への感謝や選手への激励メッセージなども含め多くの人に参加してもらいたい」としている。

1口25枚で個人、団体は問わない。県実行委のホームページからダウンロード可能な応募用紙に必要事項を記入し、メールまたはファクスで申し込む。作製、提出は8月1日までの予定。

問い合わせは、県実行委事務局県民運動担当＝019（629）6297＝へ。

健常者と殴り合い 先入観取り払うため、リングに上がる 宮嶋加菜子

朝日新聞 2016年4月4日

レフェリーが「ファイト！」と声をかけ、ゴングが鳴る。自力で立てないレスラーが横たわったまま、体をくねらせ相手の上にのしかかる。

健全者も同じリングに上り、殴り合い、蹴り合い、ぶん投げる。それが障害者プロレス団体「DOG（ドッグ）LEGS（レッグス）」のリングだ。



聴覚障害のあるレスラーと戦う人気レスラーの鶴園誠（左）。生まれつきの二分脊椎（せきつい）症で胸から下はほぼ感覚がない＝2015年10月4日、東京都世田谷区、遠藤啓生撮影



いま所属するレスラーは20人。このうち18人が障害者手帳を持っている。



名物レスラー「ラ・マン（愛人）」は、脳性まひで重い身体障害のある大賀宏二（54）。健全者の妻瑞穂



（50）と長男遥（18）による夫婦、父子対決の名勝負を見せてきた。生まれつきの二分脊椎（せきつい）症で下半身が動かない鶴園誠（38）は、端正な顔立ちと鍛え上げた上半身で女性に人気だ。

会場を埋めた観客は約300人。「乗っかれ!」「倒せっ」。出番を待つサンボ慎太郎こと、矢野慎太郎（46）とアンチテーゼ北島こと、北島行徳（50）が控室で歓声に耳をすます。

2人はともに団体を立ち上げた同志だ。

慎太郎は脳性まひの影響で言葉がはっきりしない。動きも少しゆっくりだ。

養護学校を卒業後、ごみ処理工場に勤めた。朝6時から汗だくで働いても月給は10万円ほど。学校に来ていた同世代のボランティアたちは車を買って結婚していくというのに、自分はふられてばかり。道行く人は視線をそらし、振り返ってじろじろ見る。

学校では、周りの人たちから「障害者も健全者も同じだよ」とよく聞いた。でも、社会は違った。見て見ぬふりをされ、誰からも認められない。そんな気がしてやりきれなかった。

新生活の春過去しのぶ春

読売新聞 2016年04月03日

春ですね。社会部の窓から公園で花見を楽しむ人たちが見えます。今日はこの季節にまつわる便りを紹介します。

1通目は大阪市のリナさん(25)(仮名)のメールです。<学生さん、社会人.....4月からはたくさん「1年生」が街に溢れますね。メッセージを送りたくて>

リナさん自身は昨年11月に結婚したばかりの「主婦1年生」だそうです。

<夫以外に誰も知り合いのいない大阪に来て、新生活を始めました。最初は本当に失敗の連続でした。ワイシャツのアイロンがけも初めてで、すごく時間がかかりました。ほうれん草をゆでたら葉っぱが燃えたこともあります>

愛媛の母親に電話して助言を求めること度々でしたが、ただ3か月が過ぎる頃には慣れ、最近では「何分までできるかな?」とアイロンがけをゲーム感覚で楽しんでいるとか。

<「新1年生」の方々に伝えたいのは「とりあえず3か月頑張ってみて」ということ。自分なりに楽しめる工夫ができればしめたものです>

実は三つ年下の妹さんも、春から新社会人とのこと。徳島の家具店で働き始めます。「面と向かって言うのは照れくさくて」というリナさんですが、妹さんへのエールにもなればいいなと思いました。

もう1通、大阪府枚方市の作詞家・詩川しぐれ(本名・南口繁信)さん(85)の手紙です。日曜便や前身「泉」の頃から、障害者やその家族がつづった歌詞に、作曲家がメロディーを付けて発表する音楽祭に取り組んでこられたことを紹介してきました。

2年前の当欄では、「桜の花が見たい」と病床で話していた妻輝子さんが、亡くなられたことを伝えたことがありました。その近所の天野川の桜が今年も咲き、久しぶりに便りをくださいました。

<輝子が桜の下でコーヒーを飲みたいとあって、旅立った4月2日がやってきました。私は女房のことが忘れることが出来ません。情けないやつとお思いでしょうが、女房がいてくれたから、音楽祭が続けられたのだと思います>

三回忌。私も手を合わせたいとご自宅を訪ねました。

仏前にはフキの煮物とみそ汁。遺影の写真立てはピカピカに磨かれ、隣にお骨もあります。「まだ寂しいからね。毎朝話しかけるんです」

詩川さんは台所に立つようになり、料理番組を見て好物のブリの照り焼きも作れるようになりました。でも、「輝子の方がずっとうまかったなあ」と。こうして思われて、天国の輝子さんもきっとお喜びでしょう。

帰りに天野川の桜を見ると、まだ七分咲きでした。満開になったら写真を撮って、コーヒーと一緒にお届けするそうです。(増田博一)

山口) 自立生活を送る障害者たち 新たなつながり求めて 寺尾佳恵



朝日新聞 2016年4月4日
学生ボランティアやヘルパーの介助を受けて食事をするアルゴのメンバー＝
山口市

重度障害者が共同で自立生活を送る「アルゴ」(山口市)のメンバー5人(男性3人、女性2人)は、ほぼ24時間の介護を必要としている。彼らの「自立」を支えているのが、ボランティアとヘルパーたちだ。買い物や料理、ゴミ出しなどのほか、食事や入浴、着替えなどの介助を行う。



＜金口木舌＞消えなかった記憶

琉球新報 2016年4月4日

後頭部を強打したところまでは覚えている。半日たって病院のベッドで記憶を取り戻すまで、数日前からの記憶を完全に忘れていた。回復するまで覚えることもできなかったらしい▼「何を言っても忘れるから、繰り返し聞かれますよ」。ベッドの頭越しに聞こえた病院関係者同士の会話だ。覚えているということは、すでに回復し始めていたということだ。はっきり記憶に残っている▼自分がすぐに物事を忘れてしまう状態だと突然知らされ、大きな不安を感じた。重ねてこのような会話が本人の聞こえるところで堂々とされたことも信じられなかった▼聞こえてもすぐ忘れるから、と思ったのだろう。聞こえているかいないかは別にして、もっと患者の気持ちを考え、配慮してほしかった。1日、「障害者差別解消法」が施行された時に同じようなことを思った▼障がい者に対する差別や不平等な扱いはあってはならない。加えて自分は差別などしていないと思っても、障がいのある人の立場に立って考えなければ配慮の欠けた行動をしてしまい、差別につながりかねない▼「県手話言語条例」が可決された県議会本会議で手話通訳があったことは歓迎したい。だが、障がい者が知りたいのは障がいに関する条例だけではない。一人一人が相手の立場に立って思いやる社会になれば、誰もが暮らしやすくなる。

社説：保育士不足 低賃金の改善が急務だ

毎日新聞 2016年4月4日

この1カ月、「待機児童」問題が国会で繰り返し議論されてきた。その核心は保育士の低賃金だ。

政府の緊急対策は小規模保育所の定員拡大などが柱だが、狭い場所に幼児を詰め込むのは本質的な解決策ではない。保育士資格を持ちながら離職している人は70万人近くいる。保育士の待遇改善こそ急務だ。

「賃金が低い」「事故が不安」「休みを取りにくい」。保育所を辞めた保育士に関する各種調査で上位を占めるのがこうした理由だ。厚生労働省によると2013年時点の保育士の月収は20・7万円で、全産業平均の29・5万円を大きく下回る。

保育は女性が家庭内で行う無償労働のように見られ、高齢者や障害者福祉の職員より賃金水準が低いことは以前から問題視されていた。

今回の緊急対策は規制緩和が中心で、賃金に関しては具体案が示されなかった。政府は5月にまとめる「1億総活躍プラン」に保育士の待遇改善策を盛り込むというが、賃金増を確約したわけではない。

野党は月額5万円引き上げる法案を国会に共同提出した。約2800億円の財源が必要で、保育士の数が増えるほど財源も膨らむため、政府は慎重な姿勢を見せている。

一方で、政府は低所得の高齢者に一律3万円を支給する「臨時福祉給付金」には約4000億円を計上している。給付金は1回限りの措置であり、恒久的な財源が必要な保育士給与とは単純に比べられないが、「女性活躍社会」「出生率1・8」が看板政策の政権にとって優先課題は待機児童の解消ではないか。

特に若い保育士は深刻だ。新卒で手取りが15万円未満の人は多く、奨学金の返済をしている人は生活費にも窮している。企業で働く女性正社員の長時間労働に伴って、その子を預かる保育所で働く保育士の勤務時間も延びている。休みも取りにくく、保育の仕事にやりがいを感じながらも離職に追い込まれているのだ。

厚労省は保育所に入れないために育休を延期した人などを含めると「待機児童」は当初の2・6倍に当たる約6万人に上ることを認めた。だが、認可施設以外だと自己負担が重くなるなど経済的な理由で結婚や出産をためらう人も多い。こうした人は6万人には含まれていない。

この先、若い女性の人口は減っていくため、生まれてくる子供の数も減る。できるだけ

早く安心して子供を育てられる環境を整備しておかないと、出生率の改善は見込めない。人口減少や労働力不足への対策はこれ以上先延ばしできないのである。

保育士の待遇改善は、「待機児童」6万人のためだけではない。この国の未来がかかっているのだ。

社説：児相の強化 子どもを支える社会に

北海道新聞 2016年4月4日

政府は、児童相談所（児相）の体制、権限強化を柱とする児童福祉法と児童虐待防止法の改正案を国会に提出した。

児童虐待は深刻化しており、児相強化は時代の要請と言えよう。

相模原市で、親から虐待をうけて児相に保護を求めている中2男子生徒が自殺を図り、長く意識不明が続いた末に亡くなった事件は記憶に新しい。

強制的に保護しなかったことが問題との指摘もあり、児相の対応が問われている。

改正案の審議では、こうした悲惨な事例も踏まえる必要がある。

ただ、児相の強化だけでは根本的解決は難しい。SOSを発する子どもを支える社会を構築していかなければならない。

「家に帰るのが怖い」「児童養護施設で暮らしたい」

相模原のケースでは、両親から言葉や身体的な虐待を受けていた生徒が、地元の児相に繰り返し救いを求めている。

児相は一時保護に同意するよう親に求めたが、最終的には「緊急性がない」として、職権での介入にちゅうちょした。これが結果的に最悪の結果を招いた。

法律上は、親が拒否しても児相が子どもを保護することは可能だ。しかし、家庭内に立ち入る判断や、迅速に対応する難しさは以前から指摘されていた。

法案は、児相に児童心理司や保健師などの専門職の配置を義務づけた。強制的に家庭に立ち入る「臨検」手続きの簡略化なども盛り込んでいる。

家庭内への公権力介入を必要最低限にとどめつつ、児相が虐待防止に適切に関与するには、どんな手法がふさわしいのか。国会で多角的に議論してほしい。

全国の児相に寄せられる児童虐待の相談は24年連続で増え、年間9万件近くに達している。

虐待の深刻さへの理解が広まって通報が増えたこともあるだろうが、親子関係を取り巻く環境の変化も無視できない。

少子化や核家族化により、育児を助ける身内が近くにいない世帯が目立つ。子育て世帯の貧困化や社会的孤立が虐待の背景にあるとも指摘されている。

経済的支援をはじめとする貧困解消への取り組みや、関係機関の連携によって地域の見守り体制を強めることも必要だろう。

国民一人一人が身近な子どもや子育て世帯に目配りでき、虐待の芽を早めに摘み取る環境を整えていくことが求められる。

月刊情報誌「太陽の子」、隔月本人新聞「青空新聞」、社内誌「つなぐちゃんベクトル」、ネット情報「たまにブログ」も



大阪市天王寺区生玉前町5-33 社会福祉法人大阪手をつなぐ育成会 社会政策研究所発行